

Title	老子哲学の現代的な意義付け
Sub Title	Concerning present-day meaning for philosophy of Rao-tzu
Author	土屋, 好重(Tsuchiya, Yoshishige)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1975
Jtitle	哲學 No.63 (1975. 2) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	Man's experience is able to be divided into external and internal. Basing on natural scientific knowledge, the external experience develops spheres of ontology, metaphysics and philosophy of nature. While, to the internal experience, belongs spheres of consciousness-psychology, phenomenology and existential philosophy. The philosophy or thought of Rao-tzu, the Chinese ancient philosopher, was studied as a rule from standpoint of the external spheres. Excellent quality of the Rao-tzu philosophy, however, can better be understood from standpoint of the internal, Internal human experience is classified according to present-day psychologists into three parts ; knowledge, feeling and will. Rao-tzu used such words as Positive, Negative and Neutral. These words were interpreted, here-to-fore, as metaphysical categories. These words however can be illustrated consciousness-psychologically, for they correspond to such concepts as feeling, will and knowledge. Beneath stratum of consciousness lies unconsciousness, and under that again lies pre-unconsciousness. The order of world was expressed by Rao-tzu as Heaven, Earth and Man. But, these words can also be refered to the internal spheres, as they closely correspond them.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000063-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000063-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 老子哲学の現代的な意義付け

土 屋 好 重

### 一、老子思想の基礎を内界に求める

- イ、「静を好む」ことが老子哲学の根底
- ロ、三つの意味のものに分けられる「静」
- ハ、強大は下位で柔弱が上位である

### 二、意識的自我の世界の諸問題

- イ、知情意の中核としての感情
- ロ、柔の哲学と至柔および至和の理念
- ハ、統覚における直正的統覚と歪曲的統覚
- ニ、直正的統覚としての老子における「慮」

### 三、無意識的自我の世界の諸問題

- イ、陰陽沖と天地人の意義の再発見
- ロ、老子の「静」の哲学と「清静」の概念

### 一、老子思想の基礎を内界に求める

#### イ、「静を好む」ことが老子哲学の根底

西欧思想に信頼を失なった人たちによってそれに対抗する東洋思想に興味を持たれるようになって来た。私も東洋思想、とくに極東の哲学に興味深く研究しているものである。ここに私は老子 (Rao-tzü) を取りあげてそれを現代人的な感覚に立って検討することにした。彼は紀元前5世紀・後半の中国人であって、その著作は老子道德経として有名である。現代にお

ける西欧的な精密科学や自然科学の立場から見ると、老子の哲学には殆んど学ぶに足るようなものがない。彼の哲学の長所は外面的な外界的な側面には見出し難いからである。彼の哲学の勝れた点は、外界よりも内界において、知識よりも情意とくに感情の側面において見出すことができるのである。そこで彼の思想の研究の基礎も内的な内面的なものに置かれるということが必要となる。すなわち意識心理学とか現象学とか実存哲学とかの立場が参考にさるべきものとなるのである。従来は老子の研究と言うと、道とか自然とかいう形面上学的な外界的な立場からのみ把握され勝ちであった。しかしながら、近代人にとっては意識心理学的な内界的な立場から、彼の思想が真の意味では理解されるべきものであると判断せられる。

アメリカを中心とする西欧の現代精神の一つの特徴は何であろうか。それは多分、外向的な外に向って進む精神であると言うことができるであろう。それは獲得し向上せんとする主意主義の立場である。その最も典型的な形態は経済学における私的極大利潤の追求のイデオロギーに認められることであろう。これに対して老子の思想は、道家の一般的な傾向に見られるように、内向的なものである。その最も典型的な形態は情の世界の重視、すなわち主情主義的な傾向において把握せられるのである。老子の思想の根底は「和やかさ」とか「静かさ」とかを一義的に愛好することに存するものであると言うことができる。そこで彼の思想を最も簡単に理解しようとするためには、彼の静の哲学を分析することが何よりも先づ必要であると判断されるのである。老子道德経の第57章に“我れ静を好みて（好静）民自のずから正し”（福永光司 老子 朝日新聞社 中国古典選 昭和48年310ページ）と記されている。「静を好む」換言すれば「好静」の二文字の中に老子の思想の真隨が見出せるのである。好むとは愛好することであり、意識心理学的には感情あるいは情の世界に属する活動になる。また好まれるところの静かさも感情であり情であると理解せられるのである。あるいはそれは美的な価値であるということにしても好いであろう。静を

好む老子は、当然に常に静を守り抜くことになる。そこで老子道德経16章には、“静を守ること（守静）篤（あつ）く”（福永光司 老子 91ページ）の句が記されている。

ロ、三つの意味のものに分けられる「静」

字引によって「静」の語義を調らべることになると次の如くに注釈されている。“静は動または躁と対す。躁がずしてしづまること。また安なり息なりと注す。じっとりとして、働くことを息む意なり。”（上田万年 大字典 昭和9年1416ページ） 静の語は相対する二つの側面から区分して理解できるであろう。横の関係からと縦の関係とからとである。あるいは領域的の側面からと段階的の側面からとであると見ることにしても好いであろう。横または領域的には静の語は動に対する静が意味される。ここで動とは活動のことであり働らくことである。ここで静とは動静の静であり、換言すれば動止の止を意味することになる。止とはとどまることであり、ただづむことである。そこで、止は休むことであり、また息こうことともなる。それは更に安らかなこととも共通の意味があるとされる。老子はこのような止という意味で静の語を使っている場合もある。具体的に指摘して示すと、“欲せずして以て静ならば”（福永光司 老子 207ページ）がそれである。続いて静の語を、動の対照語とせず、躁の対照語として把握すると、それは沈むことになり鎮まることになる。この場合躁はさわがしいことであり浮か付いたことまたは浮き立つことと解釈されるであろう。老子においては、静は沈むこと底深いこと落ち付いたことなどの意味に、使用されることが非常に多い。そこで彼は静を次のようにも定義付けている。“各おのその根に帰る。根に帰るを静と曰い、是れを命に復ると謂う。”（福永光司 老子 91 ページ） 静は動に対立する止の意味にも、躁に対立する鎮の意味にもとれる。しかしその二つの意味の他に、この二つの意味を合わせた、総合的な第三番目の意味にもとれるのである。それは止と鎮の意味を同時に持つ世界であって、たとえば「安らかな深さ」とか

「奥のある安らぎ」とかなどの意味の境地であると言えよう。

老子は静を好み静を守ることを説いたが、それは彼が静を主長として君として考えていたためである。これに対し静でないものはどれもみな従属者であり臣であるということになる。彼は静を主長とし重要なものであると見た。そして静でないものを軽薄なものであると見た。そのためか第26章に次のような文章を残しているのである。“重きは軽きの根たり。静かなるは躁がしきの君たり。是を以て聖人は終日行いて、輜重を離れず、栄觀ありと雖も燕処して超然たり。奈何（いかん）ぞ万乗の主にして身を以て天下に軽がろしくせんや。軽がろしくすれば則ち本（臣とする書もある）を失ない、躁がしければ則ち君を失なう。”（福永光司 老子 154ページ）老子に従がうと、静の情は意識の君であり意識の主であったのである。そして静でないものは臣であるのに過ぎなかったのである。また静なるものは意識の根であり本であるが、静でないものは軽い浮わつたものであるのに他ならなかったのである。

へ、強大は下位で柔弱が上位である

老子は一般の人たちの俗見とは違がい、静を好み休息を愛した。そして強壯なるものよりも柔弱なものをより多く重んじ、終局的には、柔弱な雌や牝（めうし）の立場の方が強壯な雄や牡（おうし）の立場に勝つものであり、上位の位にあるものであると確信していた。すなわち彼によれば静や柔が主長であり静や柔でないものは主長ではあり得なかったのである。また静や柔が、万物の根本とせられ人間生活の自然であるものと信ぜられたのである。彼のこの信念を示す道德経中の語句には下記のようなものが列挙せられるであろう。“牝（ひん）は常に静を以て牡（ぼ）に勝ち、静を以て下ることを為す。”（福永光司 老子 326 ページ） “強大は下に処（お）り、柔弱は上に処る。”（同老子 381ページ） “柔弱は剛強に勝つ”（同老子 293ページ） 老子は柔弱なものだけを好み、剛強なものを全く廃したのでもない。柔を主とし剛を従としてその両者が調和的に並存せら

れることを理想としたからである。すなわち彼は、柔と剛、または弱と強または柔と柔でないものとの包含された、谷あるいは容（ウカソムリのある谷）の境地を理想とし自然であると考えたのである。それについては第28章の次の文章が明らかに示しているものと言える。“其の雄を知りて其の雌を守れば、天下の谿(たに)と為る。天下の谿となれば常德離れず。”（同老子 164ページ）

## 二、意識的自我の世界の諸問題

### イ、知情意の中核としての感情

内界すなわち一般に言われているところの意識に関して、哲学事典な下記のように解説している。“心理学的に言うとき意識は通例、知情意の三方面に分類される。これら三方面は多少とも統一されており、また明暗の差を有する。……意識の流れは睡眠によって中断される。しかし意識の機能はそれによって全くなくなるとは考えられないから、無意識ではあるがなお効力を保有する。”（平凡社 哲学事典 昭和46年69ページ）意識を知識と感情と意志とに分ける考え方は今日では多くの哲学や心理学の専門家によって承認されることになっている。生物学や生理学の立場からも意識を同じように分析することが出来る。何となれば人間は外界から刺激を受けると共に外界に対して活動をなすものとされるからである。外部からの刺激に対する意識は知識であり、外部への活動に対する意識は意志である。そしてその両者の中核をなす内面的な活動は感情であると言えるのである。知情意の活動の中で最も根底的な中核的な活動は感情であって、それは老子のいわゆる君とか根とかに該当するところのものである。これに対して意志や知識は臣としての付随的な補佐的な活動をなすものであると分析せられることになる。より厳密的には、意志は積局的な付随活動であり知識は消極的な付随活動であることの方が好ましいであろう。なお見方を変えることにすると、感情は意識の目的としての立場のものである

るとされ、意志や知識は手段としての立場であると解されることになる。老子は静を君と考えるのであるから感情を主長として一義的に重んずる。これに対して躁(動)や意志の立場は臣としてしか重んじない。また静と躁(動)の間にあると思われる、混とも言うべき知識の立場も、臣としての立場に置かれることになる。

老子ばかりでなく道家やその流れに立つ東洋思想は、いづれも静を重んじ情を主長とすることに対して同意を与える。しかしながら主意主義の傾向を重んずる西欧思想においては、感情を一義的な重要な活動であるとする主情主義の考え方は、受け入れがたいものになっている。けれども主情主義的な考え方が必ずしも皆無なのではない。何となればギリシヤにはエピクロス (Epikūros) のような快楽主義の哲学者もいたからである。またアメリカにはポー (Edgar Allan Poe) のような詩人もいたからである。ポーは感情としての趣味の重要性を承認して次のように主張している。"心の世界を三つの最も直接的な明瞭な分野に分けると、純粹知能 (pure intellect) の世界と趣味 (taste) の世界と道德感 (moral sense) の世界とを挙げることができる。私は趣味の世界を三つのものの中央に置いている。何となれば趣味が心の中で占める地位が正に中央だからである。趣味は純粹知能と道德感との両端に密接に関係しているものである。……知能が真理 (truth) に関連を持つ如く、趣味は美 (beautiful) を報道し、また道德感は義務 (duty) に関与する。" (Allan Poe; The Complete Tales and Poems 1831—A Modern Library, Giant p. 923.)

#### ロ、柔の哲学と至柔および至和の理念

老子道德経の中には知情意に関するまとまった記述が残されていない。けれども老子も知情意の考え方に近い立場を持っていたように推測されるのである。道德経の第3章に"無知無欲" (福永光司 老子 23 ページ) の話がある。無知の語が知識を想定させ、無欲の語が意志を想起させることは当然のことと言えよう。なお第37章には"欲せずして以て静ならば"の

句があるが、その場合に欲せずしての語が意志と関係があることは言うまでもない。そして後に残されるのが静ならばの語であるが、それは静の情のことであると推測せられるのである。このように探究して行くと老子も知情意の考え方と近い見方をしていたと言うことが理解せられるのである。老子の知情意の考え方を更に好く具体的に示すものは、彼の陰陽沖に関する概念であると判断される。第42章に“万物は陰を負うて陽を抱き、沖気もって和することを為す”（老子243ページ）の文がある。陰は老子においては柔や雌や静を意味することになる。そして感情の世界や情の世界を意味するものと言えるのである。次に陽の語は剛や雄や躁と共通する概念であるものと解される。そしてそれは感情に対する意志の世界と符合するのである。その次が沖であるがそれは陰陽とは別のしかも陰陽と対立するところの語である。それは中とも理解されるが児すなわち子供の中性に該当するものであると推測せられるのである。意識活動としては知識がその世界に符合することになる。このように分析して行くと老子の陰陽沖は感情と意志と知識の三つの意識に照応する概念であるものとして把握されることになる。沖を中性の意味にとらず盅（いれもの）の意味に解する方法が一般に広く普及している。しかしながら私は沖を児の意味にもとれるものであるとして考えている。

意識が知情意に分けられると同様に情なら情も、更にその下部活動に知的・情的・意的な三つの活動を傘下に持っている。たとえば感情の下に知的感情と意的感情と情的感情とが分けられるが如くである。意識において意志が働らくことを代表し、知識が考えることを代表し、感情が和やかさの楽しみを代表する如く、感情内の下部活動もそれぞれ独特の和の活動を分担する。たとえば意的感情がスポーツや賭け事に興ずるものとされ、知的感情が新しい物を求めたり不思議なことに興じたりする如くである。そして情的感情が純粹の和やかさや至和の意識を愛好するが如くである。老子は感情を一義的な重要なものであると考えた。感情的でない労働や生産



よりも感情的な和やかさや消費の方を重要であると見たからである。しかしながら彼は感情の中でも情的感情を最も重視したのである。それは単なる和の世界ではなく至和の世界であり、そして単なる柔の世界ではなく至柔の世界である。老子の語によれば“和の至りなり”（老子 301ページ）とか“天下の至柔”（同248ページ）などがそれに符合するものになるであろう。至和至柔の境地を現わす言葉としては、しばしば安とか平とかの言葉を二つ重ねて示すという方法がある。安和とか柔和とかがその方法によるものであって、老子第35章では“安平”（同199ページ）の語が使用されている。“恬淡”（同180ページ）の語も、やすらかにしてたいらかの意味を持つから、情的感情の理想郷を表現しているものであると言える。

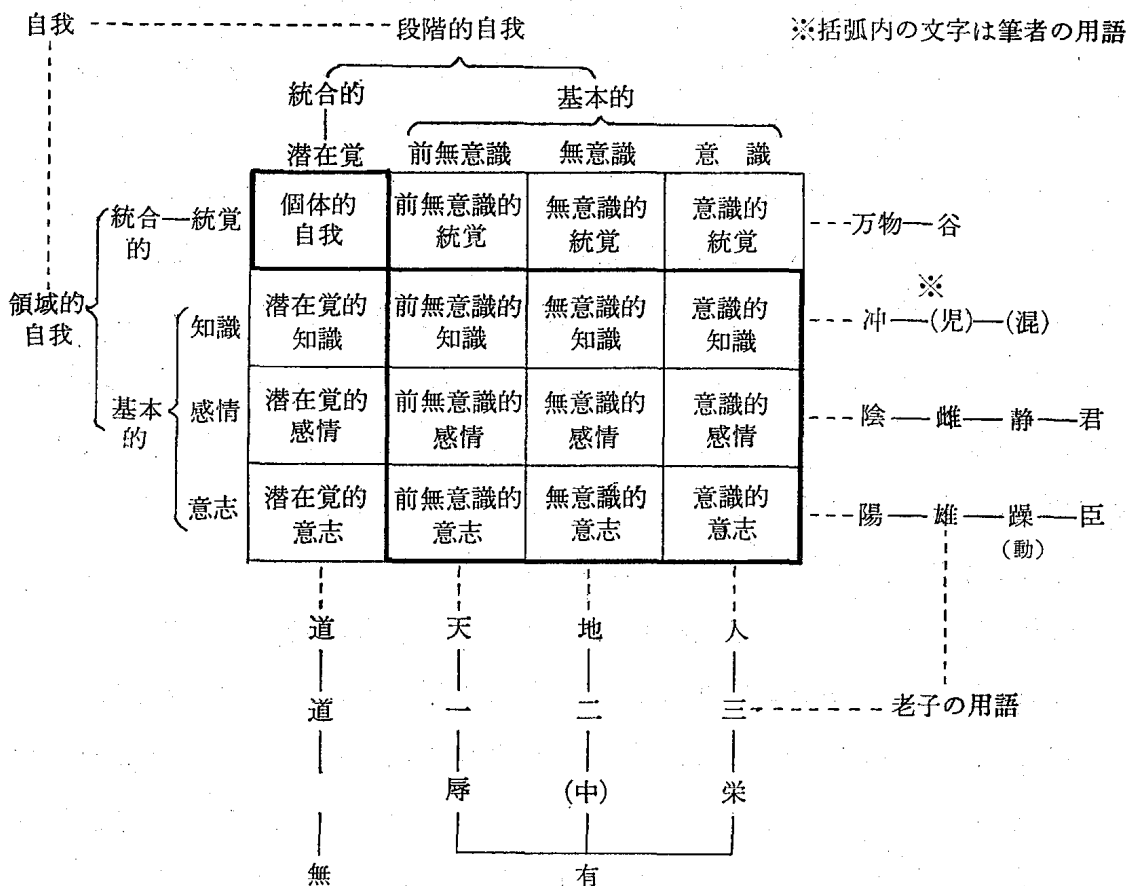
ハ、統覚における直正的統覚と歪曲的統覚

自我という語は色々の意味のものに分けられるのであるがここでは便宜上、意識すなわち意識的自我のことを自我と呼ぶことにしよう。この意識的自我は基本的なものと統合的なものとに区分される。基本的な意識的自我はいわゆる知情意であって、それは厳密には意識的知識と意識的感情と意識的意志との三つの分野を包括するものと言える。知情意はともに基本的意識を構成する三つの属性であって、それぞれ対等的な立場に立っているものである。そこで知識は知識の勢力を拡大せんとし、意志は意志の領域を拡大せんとし、感情は感情の分野を拡大せんとし、たがいに相競うことになる。その結果統一のないバラバラな状態が生ずることになってしまうのである。理想的な自然状態においては、中央に位する感情が重んぜられ、それを取巻く知識や意志は相対的にしか重要視されないで好いことであろう。しかしながら知情意の活動は別に、相互の間に調整をなすための力を持っていないのである。そこで調整のための役目を果たすものとして統覚が活動することになるのである。統覚の活動は知情意のようなそれぞれの基本的意識を統合するものである。統覚に関しては哲学事典に次のような解説がなされている。“統覚. apperception (英・仏), Apperzeption

(独)……心理学的にこの概念を発展させたのはヴント (Wilhelm Wundt) である。積極的活動感情のともなう能動的統覚を受動感情のともなう受動的統覚から区別し、ふつう前者を統覚、後者を連合とした。こうして意識内容の統覚的および連合的活動によって経験を説明しようとした。” (平凡社 哲学事典 昭和46年100ページ) 私が取りあげることにした統覚とはこの前者の統覚に近似したものである。

統覚は知情意を統合する総括的な意識であるが、その活動を二つの方面に分けることができる。一つは直正的な統覚活動であって他の一つは歪曲的な統覚活動である。直正的な統覚活動は自然の傾向に順応した統合をなすものである。それは知情意の中の感情を一義的に重視した統合をなすも

<内的自我の分析とそれに対応する老子の用語>



のだからである。これに対して歪曲的な統覚活動は、別に感情を一義的に重んじなくとも全体が統合されさえすればそれで満足するところの活動である。そもそも図表に示されているように、意識は意識的統覚と意識的知識と意識的感情と意識的意志とに区分せられるのであるが、それらを老子が使用した用語に該当させてみることにするとどうなるであろうか。図表の右端に示された老子の用語がそれを現わすことになる。すなわち統覚に相応するものを万物とすると、知識に相応するものが沖とされ、感情に相応するものが陰とされ、意志に相応するものが陽とされるのである。また別の用語で表現することになると統覚に相応するものが谷とせられ、知識に相応するものが児とせられ、感情が雌とされ意志が雄とせられるものである。万物・沖・陰・陽の諸概念に関しては老子の中に明文をもって“万物は陰を負うて陽を抱き、沖気をもって和することを為す”（福永光司 老子 243ページ）と記されているので、何の補足説明も格別に必要としないであろう。けをども谷・児・雌・雄の諸概念に関しては説明を要することであろう。何となをば老子には“其の雄を知りて其の雌を守れば、天下の谿となる”（老子 164ページ）としか記されていないからである。谿が谷と同じ概念であることに関しては問題とならないことであろう。けれども老子は、雌と雄を対立させるだけであって、児の概念については別段に言及していないのである。しかしながら、陰陽沖の概念に対比させれば、雌雄児の概念が考えられるのが当然のこととされるのである。そこで私は敢えて老子の記さなかった児の語を図表の中に表示することにしたのである。

## 二、直正的統覚としての老子における「慮」

直正的統覚とは真つ直ぐな統覚のことであり正直な統覚のことである。それは物事の自然の姿に従うことにする統覚である。そこでそれは感情を一義的に重んずることになる。そしてその次に意志を重んじ、更にその次に知識を重んずるものとなる。別の角度から表現すれば、感情を主とし意志と知識とを従として重んじ、知情意を自然の姿に置こうとするものであ

る。老子は直正的統覚のことを徳と記している。実例を挙げて示すと第49章に次のように記述しているのである。“善なる者は吾れ之を善とし、不善なる者も吾れ亦た之を善とす。徳、善なり。信ある者は吾れ之を信とし不信なる者も吾れ亦た之を信とす。徳、信なり。”（福永光司 老子 271ページ）老子は善なるものも悪なるものも共に善人と考えた。人の本性は善であると見たためである。同様に正直な人も偽わる人も正直であると考えた。人の本来の性質が直正なものと見たからである。老子の徳の語は私の言う直正的統覚の語に相当するものなのである。もともと徳とは「惇」（とく）と記されることが始まりであると言われている。「惇」とは、直の字と心の字の合わせられた語であって、直き心を意味するのである。それが私の言う直正的統覚と符合する言葉であることは論議するまでもないことである。

歪曲的統覚とは、統合はするけれども、自然の姿に反して綜合する活動である、たとえば意志を一義的に重んずる主意主義の立場の如き場合のそれである。この場合においては意志が一義的に重んぜられることばかりでなく知識が一義的に重んぜられることもあるであろう。また知情意のどれをも等しく重んずるという方法による場合も含まれるであろう。けれども情を知や意と平等に重んずるということは、形式上は理想的のようであるが、情を中核としている自然の姿を現わさないものとなることになる。そこでそれもやはり歪曲的統覚の立場であるものとして排撃さるることになるのである。

直正的統覚は一応は情を中核的なものとして重視する理想的な自然的な活動と見ることが出来る。けをどもこの直正的統覚の中にも更に二つのものが分析し得られるのである。一つは究極的な直正的統覚の活動であって、他の一つは非究極的な直正的統覚の活動である。何を規準としてこれが分けられるかと言うと、情の中にも知的感情と意的感情と情的感情とが区別し得るためである。感情の中の感情とも言うべき情的感情は意識の中

核のまた中核に相当するものである。老子の用語を借用してそれを示すことにすると、それは君の君の立場に相当することとなる。情的感情は単に和を愛好するのに止らず、和の和を愛好し至和の世界を愛好するものである。直正的統覚が単に感情を中心としての統合をなすだけならば、それは究極的な直正的統覚の立場に立つことにはならないのである。直正的統覚が情的感情を中核として知情意全体の統合を図る時、始めて究極的な直正的統覚の立場に立つことになるのである。それは至和を中核とした究極的な直正的な統覚の活動であると言えるのである。またそれは恬淡を中心においた知情意の究極的な統合の活動であるとも言えるであろう。

### 三、無意識的自我の世界の諸問題

#### イ、陰陽沖と天地人の意義の再発見

自我あるいは個体的自我の内界はこれを領域的自我と段階的自我とに分けることができる。そして意識あるいは意識的自我は最も発達した段階的自我であると言われている。意識的自我の根底には一般に無意識的自我があるとされる。それは睡眠時における自我の境地に相当するものである。人間が死ぬと、睡眠状態以前の前無意識とも言うべき状態に帰るものと推定されている。そこで意識は動物の世界に、無意識は植物の世界に、そして前無意識は物質の世界に照応するものであると判断されることになる。図表に示さているように段階的自我は基本的自我と統合的自我とを包含するものである。基本的なこの段階的自我は前無意識と無意識と意識の三属性を有することになる。それでは統合的な段階的自我とは、一体どんな活動をなすものなのであろうか。それは段階的自我における統覚に相当する機能を果たすものである。それは潜在意識的統覚と呼ばれても好いであろう。あるいは語を簡略にするため潜在覚と呼ぶことにしても好いであろう。老子の思想は一般に外界的に形而上学的に把握されるものとなっていた。しかしながら、段階的自我の分析をなすことにすると、老子の思

想がたまたま内的な意識心理学的な考え方に適用され得るものであることが想起されるのである。何となをば老子の道・天地人の概念がそのまま段階的自我の諸段階に照応するものと理解されるからである。すなわち老子の道が意識心理学的な潜在覚に照応することとなり、老子の天地人がそれぞれ意識心理学的な前無意識・無意識・意識の諸段階に照応することとなるからである。

領域的自我の世界が統覚と知情意に区分せられる如く、段階的自我の世界は潜在覚と前無意識・無意識・意識に区分せられるのである。そして後者が老子の道と天地人の概念に照応する如く、前者は老子の万物と陰陽沖の概念に照応することになるのである。老子は陰とか雌とか静とかの概念を一義的に重んじた。そしてそれらを君や主長の立場に置くことを敢えてしているのである。それと同様に老子は天の概念を一義的に重んずるということにした。そのためか天を一とも呼ぶことにしている。たとえば老子道德経に次の文章が綴られているのである。“道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。”（福永光司 老子 243ページ）しばしば一が一气であると解釈されたり二が陰陽であると註釈せられたりしている。けれども私としては一が天であると解釈することも可能であるものと考えている。道德経第25章にある、“人は地に法（のっと）り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る”（老子 144 ページ）の文章に相い応ずるものとして、同じ道德経中の第42章にある、“道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生ず”の文章が、把握し得られる筈だからである。もしも天や一を、君とか根とかの如く一義的な概念であるとする、地とか人とかは、二義的な概念にされることになる。そして道が君としての天と臣としての地や人を統合する地位にあるものであると考えられる。

老子は“其の雄を知りて、其の雌を守をば、天下の谿となる”と説いた。それは領域的自我における統覚と知情意に関する論理を示すものであると理解される。ところが老子は、これと同じ形式をもって次のようにも説い

ているのである。“其の榮を知りて、其の辱を守れば天下の谷となる。天下の谷と為れば常德乃ち足りて樸に復歸す。”（老子 160ページ）老子は  
この場合には、当然に、段階的自我における関係の論理を展開しているものであると判断される。そこで老子は遺憾ながら、領域的自我に関する議論と段階的自我に関する議論との間に、若干の混同を犯してしまっているもののようである。いづれにしても、辱とは「見すばらしい」あるいは「みじめ」な状態を意味し、榮とは「さかん」な状態を意味する。辱は天の原始的な状態であり榮は人の文明した状態である。老子は辱と榮の間の中を入れることをしていない。けれどももしも辱と榮との間に中を、天地人に照応させて、置くことにすると、老子としては辱を一義的に重んじる立場をとることにしていたものと理解される。そして辱の立場を主長の立場とし、中や榮の立場を臣や従属者の立場であると考えたものであると推測せられる。辱の立場は樸の立場であり原始的な素朴の立場である。原始的な素朴の立場は一切の文化文明の基礎とされるものである。原始的な素朴な立場を基礎に置かないような文化や文明はその基盤を十分に持たぬものであるとすることができる。老子の陰陽沖の概念や天地人の考え方は、現代の人たちによって、往々にして前時代的な空想的な哲学の遺物であるように見られがちである。しかしそのような見方は外面的に形而上学的に解釈される場合においてのみ妥当するのに過ぎない。もしも陰陽沖とか天地人とかの概念を、内面的にあるいは意識心理学や現象学の立場から検討し直すことにすると、それは皮相的な見方であるものとせられるであろう。ここに、老子の哲学の内的な内面的な省察を行なうことによって、その偉大な意義を改めて再認識することの必要性があらう。

#### ロ、老子の「静」の哲学と「清静」の概念

知情意には厳密には意識的知情意の他に、無意識的知情意や前無意識的知情意も包含せられることになる。しかしながら老子は、専ら意識的知情意の側面だけを研究の対象に置いている。ここにおいて老子の知情意につ

いての考え方を簡単に研究して見ることにしよう。彼は意志の分野に関して無欲とか無為と言うことを強調するのである。しかしながら彼の言う無欲とは欲を全く排撃してしまうことではなかった。それは少欲を意味する。そこで彼は次のように記している。“私を少なくし、欲を寡（すくな）くす。”（老子 106ページ） 無為も同様に何も為さぬと言うのではない。敢えて為すことはしないと言うだけのことに過ぎない。彼は知識の分野に関しては無知と言うことを主張する。一体彼の言う無知とはどんなことを意味するのであろうか。彼は“人を知る者は智、自ずから知る者は明”（老子 191ページ）と記している。すなわち外面的な知識は排し、内面的な知識は却ってこれを奨励しているのである。ただそれを人に誇ったりしてはならないとされるだけである。感情に関しては彼は“無味を味わう”（同 336ページ）ことを要請しているのである。字引によると無味とは“味わいのなきこと”（上田万年 大字典 1467ページ）と解釈されている。何の味わいも無いような素朴なつまらぬものの中にも何らかの快適さを見出そうとすることを彼は理想にしたのであろう。

老子は静を好み静を守ることにした。静とは一方において和であり柔らかさである。そして他方において深さであり素朴さである。老子は静を君であるとし根であるとまで考えた。彼の思想は「静」の哲学であると言っても過言ではないと思う。彼は「静」を重んずるの余り「清静」の語も使用することになっている。具体的にはそれは“清静にして天下の正となる”（同255ページ）という文章となって残されている。彼は「清静」の語によって「至静」あるいは「静之静」を表現しようと考えたのではあるまいか。残念ながら道徳経の中には至静の語は記述されていない。莊子の中には「静之至」（明治書院 新釈漢文大系 8 莊子下 450ページ）が出ているが、その語は老子には用いられていない。けれども老子の清静を至静の意味にとることにするとそれはどのような内容のものと解釈されるであろうか。それは領域的には至和とか至柔とか至安とかの境地を意味することになる。



そして段階的には至樸とか至辱とかが意味されることになる。つまり一方和の和の境地であるとともに、他方樸の樸の境地であって、その両側面を兼ね備えるということが至静の理想であると考えられるのである。老子の哲学は結局において至静の哲学であったものであるとすることができるであろう。それは単に静の概念を主長としているものであるばかりでなく、それは至静あるいは清静の概念をその根本であるとしているものであろう。

## Concerning Present-day Meaning for Philosophy of Rao-tzū

*Yoshishige Tsuchiya*

### Résumé

Man's experience is able to be divided into external and internal. Basing on natural scientific knowledge, the external experience develops spheres of ontology, metaphysics and philosophy of nature. While, to the internal experience, belongs spheres of consciousness-psychology, phenomenology and existential philosophy. The philosophy or thought of Rao-tzū, the Chinese ancient philosopher, was studied as a rule from standpoint of the external spheres. Excellent quality of the Rao-tzū philosophy, however, can better be understood from standpoint of the internal.

Internal human experience is classified according to present-day psychologists into three parts; knowledge, feeling and will. Rao-tzū used such words as Positive, Negative and Neutral. These words were interpreted, here-to-fore, as metaphysical categories. These words however can be illustrated consciousness-psychologically, for they correspond to such concepts as feeling, will and knowledge.

Beneath stratum of consciousness lies unconsciousness, and under that again lies pre-unconsciousness. The order of world was expressed by Rao-tzū as Heaven, Earth and Man. But, these words can also be referred to the internal spheres, as they closely correspond them.